

---

# 魔王陛下、お仕事ですよ

鈍色満月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王陛下、お仕事ですよ

### 【Zコード】

Z0974Y

### 【作者名】

鈍色満月

### 【あらすじ】

「　ふー。勇者の奴、漸く帰ったか」

異世界から召還された勇者は、長い長い旅の末に魔王を討ち滅ぼす。魔王討伐に成功した勇者一行が魔王城より立ち去った後、主を失い、廃墟と化した魔王城の一角にて蠢く影が。

それこそ幼子の姿こそしているが、先程勇者に寄つて止めを刺され、滅ぼされた筈の魔王であった。

「全く。魔王様が本気になればあの様な餓鬼なんぞ、一発で昇天だ  
といつのに……」

「ふつぶつうるせござ、そー。口動かすなら仕事しろ」

愛すべき魔族達に囲まれて、今日も書類仕事に勤しむ魔王陛下。魔  
族の父であり母である魔王の平穏なる（？）日常の数々をどうぞ、  
お楽しみください。

\* 現在、魔王城の新たな日常を更新中！

## 終わりから始まる物語（前書き）

### 勇者一行のメンバー

- ・勇者（異世界人）
- ・弓使い（頼れる兄貴分）
- ・僧侶（溫和な平和主義者）
- ・女魔法使い（典型的ツンデレ）
- ・盗賊（生意氣な子供）

## 終わりから始まる物語

暗雲渦巻く、奇形の鳥達が飛び交う暗黒の城・魔王城。その城の奥の奥、深部の深部。魔王とのラストバトルに相応しい、巨大な大広間では死闘が繰り広げられていた。

「 覚悟しろ、魔王！…」

やつて来たのは、異世界から世界を救うために召還された勇者とその仲間達。

白銀に輝く聖なる剣を握りしめ、前を、魔王を見据える視線に迷いは無い。

既に戦いは長時間に及んでいる。

幾ら百戦錬磨で知られる勇者とその仲間達をもってしても、魔族の王にして闇の眷属の頂点であるという魔王を相手に無傷で済む筈が無い。

戦いが長引くにつれ、勇者にも、その仲間達にも、傷が増えていく。

『 グオオオオオオオオオオ…』

しかし、それは彼らと対峙する魔王とて同じ事。

両者が相見えた際の、何処か人間離れした魔性の美しさなどついに消え失せ、魔王は今や人の形を留めぬ異形の姿をしている。

「 くつー！ じぶといなー！」

「腐つても相手は魔王ですからね」

『使いが滴る血を鬱陶し気に拭いながら吐き捨てる』と、温厚な顔立ちの僧侶が頬に汗を滲ませながら同意する。

勇者一行の焦りを感じたのか、異形の姿となつた魔王がますます攻撃の手を強くする。

それを女魔法使いの結界でなんとか凌ぐが、相次ぐ攻撃の数々に徐々に結界に輝きが入つていく。

「勇者！ この結界が破れた時が勝負です！ 一瞬だけ魔王の動きを止めますから、貴方はその隙に！」

「分かった！」

僧侶の悲鳴の様な叫びに、勇者が頷いて聖剣を握りしめる。

甲高い破碎音と共に女魔法使いの結界が破られ、同時に僧侶の詠唱が完成した。

「今だよ、勇者！ やつちやつてーーー！」

未だ幼い盗賊が勇者を振り返る。

僧侶の呪文によって創られた黒鉄の鎖が魔王の動きを拘束する。動きを封じられ、魔王が悔し気に咆哮を上げた。

そうして、

「わあああああーーー！」

勇者が叫びながら、魔王へと特攻する。

彼の持つ聖なる呪文を刻まれた聖剣が閃光を放つと、そのまま魔王の体へと突き刺さった。

弱点である心臓を聖なる剣に貫かれ、魔王が断末魔の悲鳴を上げながら一気に灰と化す。

大きく息を吐く勇者の目の前で、彼の旅の目的であつた、世界を破滅へと導くと伝えられる魔王は消え失せた。

「お、終わった……」

精魂尽き果てた勇者の膝が崩れ、彼の仲間達が慌てふためきながら

やがて、魔王という脅威を見事退治し、世界へと平和を齎した彼らを祝福する様に、魔王城へと一條の光が差し込んだのであった。

**終わりから始まる物語（後書き）**

次の話より本編開始です。

## 勇者の去った魔王城（前書き）

終わりから始まる物語、その通りです。

## 勇者の去つた魔王城

先程までの激しい死闘の跡が残る、魔王城深部。

普段であれば魔族の王が配下の者達と謁見に使うそこは、所々崩れ落ちた壁面の隙間からは口差しが差し込み、砕けた石造りの柱の欠片が乱雑に転がる、何とも哀れな空間になっていた。

壇上の真紅の垂れ幕が半分引き千切られた上に埃を纏つた情けない姿を晒している中で、壇上中央の黒と金で飾られた玉座だけがその姿を傷付ける事無く、完全な形を残していた。

魔王は消え失せ、勇者が去つた後の空間に幼い声が響き渡つた。

「ふーー。勇者の奴、やつと帰りあつたか

まさに魔族の王に相応しい、他者を威圧する玉座の後ろから出で来たのは、小さな人影。

歳の頃はおそらく十歳程度の幼子。

体の至る箇所に埃を付けたまま、子供は大きな溜め息を吐きながら、半壊した謁見の間を見渡した。

「やれやれ。修繕とてただではないのだぞ、勇者の奴め」

ぱんぱん、と服を叩いて埃を落しながら、幼子が呟く。

その稚い容姿と相反した老成した眼差しで視線を巡らせる子供の姿を、去つて行つた勇者達が目撃したならば、おそらく悲鳴を上げたに違いない。

肩まである光を吸う様な黒髪に、金色がかつた琥珀の双眸。雪の様に真っ白な肌と鮮やかな朱唇。

指の爪先から髪の一筋に至るまで完璧な美の極致とも言えるその姿。

美しいけれど、男とも女とも判別出来ぬ、中性的な顔立ちの幼い子供。

その子供が、先程勇者一向によつて退治された筈の魔王と同じ顔をしていたのだから。

より正確にいえば、勇者一向のせいで異形の姿となる前の魔王ではあるが。

魔王と瓜二つの美しい容姿の子供は、再度溜め息を吐くと、踵を高く打ち鳴らした。

すると、押し進められた時計の針を巻き戻す様に、室内に散らばる瓦礫の山がゆっくりと動き出す。

崩れ落ちた壁面の欠片は碎かれた箇所を塞がれ、砕けた柱は真っ直ぐに。

所々陥没した床面は元の滑らかな姿を取り戻し、引き千切られた垂れ幕は修繕される。

「……まあ、ざつとこんなものか」

立ち所に謁見の間を元の壯麗な空間へと戻した子供は、満足げに辺りを見回す。

そんな子供に、怜悧な声がかけられた。

「お戯れが過ぎます、我らが魔王陛下」

魔王、と呼ばれた子供がゆっくりと振り返る。

琥珀の視線の先にいるのは、先程勇者一行と共に去つた筈の僧侶

であつた。

## その訳その意味その理由

「やあ、僧侶。中々怖い顔だな。勇者が見たら卒倒するぞ」

「……何故このような真似をなされたのか、理由をお窺いしても？」

とうに魔王城より勇者と共に去つた筈の、しかも敵である筈の僧侶に向けて、魔王と呼ばれた子供はニヤリと笑みを浮かべる。

茶化す様なその仕草に、僧侶の眉間の皺が深くなつた。

「貴方様が気まぐれで動く方だと言つのは我らとて承知の上ですが、その様なお姿になられてまで、何故このような洒落にならぬ戯れをなされたのですか？」

「怒るな、怒るな。折角の綺麗な顔が恐ろしい事になつていて」

くすんだ色の飾り気も何も無い僧服を纏つていてる僧侶は、よくよく見れば整つた顔をしていた。

地味な格好と短く切り揃えられた髪に縁なしの眼鏡のせいで、その容姿はどこか乾いた物として他者の目には映つていただけ。

魔王と呼ばれた子供の言葉を聞き、僧侶が鬱陶し気に付けていた眼鏡を外して薄茶色の髪を搔き揚げる。

すると次の瞬間には、先程までそこに居た地味な僧侶は消え失せ、他者の目を集めずにはいられない、怜俐な美貌の青年へと姿を変えていた。

薄茶色の髪から、銀糸の混ざった灰髪へ。

温和な輝きを宿していた茶色の双眸は冷たい光を宿した藍色に。

その身に纏う質素な僧服でさえ、まるで貴族の礼服を着てている様

な錯覚に陥らせる。

「わざわざ」の私を人間に扮させ、勇者一向に加入させたのです。当然、それなりに意味を持つ行為であったのでしょうか？

その慇懃無礼な態度に子供は腹を立てる事無く、滑る様な動きで壇上より降り立つて、僧侶であった青年の前へと歩を進める。

「その点に関してはよくやつてくれた。

勇者一行が無事に此処まで辿り着けたのもお前のおかげだ。

感謝するぞ、藍玉」

「お褒め戴き恐悦至極、我らが魔王陛下。ですが、誤摩化されません」

ギン！ と殺氣立つた眼差しで青年が魔王と呼ばれた子供を睨みつける。

「何故、危険を犯してまで、あの様な餓鬼に討たれる真似などなされたのです？」

「だつて、仕方ないじゃないか。 あの勇者、泣いてたんだから」

居心地悪そうに、明後日の方向へと視線をそらした魔王が、口を尖らせた。

その訳文の意味その理由（後書き）

魔族の名前は漢字一文字で色がつきます。

## 一方的な邂逅＜前編＞

まあまあ月の夜だった。

初代にして永代たる魔王はその晩、一人で出歩いていた。

普段だったら口うるさい一部の魔族（例えば藍玉）が護衛と称して傍をいるのだが、不意の気まぐれで出かけただけであつて、魔王の側には誰もいなかつたのだ。

それこそ風の向くまま気の向くまま、悪戯にあちこちを歩き回つていた魔王であつたが、少しばかり休憩しようつと思い、たまたま田についた森へと降り立つた。

森の側にはそこそこの大きさの村があり、夜遅くだというのに煌々と松明の光が村中に灯つっていたから、どこからか貴人でも来ているのだろうか、と魔王は思つた。

祭りだつたらこつそり紛れて御馳走でも摘まめないだらうかと、半ば魔王にあるまじき事を考えていたら、魔王の鋭敏な聴覚が奇妙な音を聞き取つた。

何かを啜るような情けない音と途切れ途切れの嗚咽。

さては村の子供が泣いているのかと、魔王が一人納得していると、目の前の木々が揺れる。

そうして出て来たのが、この度、異世界から召喚された勇者であつたのだ。

\* \* \*

「ひつぐ、ひつぐ。うう……」

「おこ……」

「どうせ、どうせ僕なんか……」

「おー。おー、そこの」

「 なんて出来るわけないよ……ぐすり」

「聞いとんのか、小僧!」

「びやつ!？」

あまりにも無視されるもので、ついに声を荒げると世界を救う  
筈の勇者の肩が大きく震える。

ビクビクとまるで人に慣れない小動物めいた言動に、魔王が小さく微笑む。

「おい、何をそんなに嘆いている。話してみる、少しは気が楽になるかもしれんぞ」

「そんな事言つたつて…………」

あまりにも悲観的な言動に、本当にこいつは勇者なのだろうかと魔王は思つた。

この世界の生物とは異なる独特的のオーラと腰に佩いた聖剣からして、つい先月に某・王国で召還された筈の勇者である事は間違いないだろうが、この霸気のなさは如何したものか。

なんて事を魔王が考え込んでいふとは露知らず、（暫定）勇者の方は視線を地面に落としたまま、ぶつぶつと何か呟き続けている。

「 取り敢えずお前、その鬱陶しい言動を直せいやめろ。聞いてて苛々する」

「ひい！ 何か色々すみません!—！」

自分でもかなりドスの聞いた声で脅しをかけると、勇者は背筋を伸ばして漸く視線を上げる。

焦げ茶色の髪に同色の瞳と言つ、取り立てて何ら変哲の無い容姿

の青年、いや少年だ。

「それで、何をそう、悲観的になつていいんだ？ 女にでも振られたのか？」

「なつ！？ 違います！－！」

茶化す様にそう言つてやれば、顔を真っ赤にしてじらじらを睨みつけて来る。その姿が愉快で、魔王は喉の奥で笑つた。

「そんな浮ついたものじゃあつません！ もうと、もつと深刻な物なんです！」

「そりかそりか。なら、まずは話してみる」

もしその時が昼間だつたり、普段の様に勇者の周りに仲間がいたのであればおそらく勇者はそれ以上何も言わなかつたであらう。その日の魔王の格好といえば、黒の衣装で全身を包んだ上に、目深までフードを被つた、ある意味不審者スタイルであったのだから。

「魔王を倒してこい、って言われても僕には出来る筈ないの……」

まあ結局、様々な要素が加わつて、勇者はその一言を口にしてしまつたのだ。

## 一方的な邂逅く前編く（後書き）

勇者は自分に自信が無い子。  
やれば出来るのだけれども。

## 一方的な邂逅く後編＞（前書き）

勇者は勇者で中々大変な目にあつてきました。

## 一方的な邂逅く後編>

勇者の話を纏めると以下の物だった。

勇者本人は異世界において特に秀でた所のない、平々凡々な少年であったと言つ。

何ら変哲はない平和な一日、学校からの帰路の途中に足下に浮かんだ魔法陣に引き摺られる様にしてこの世界へと召還される。

見知らぬ場所で出会つた自称・魔王に、開口一番で世界の平和を齎すために悪の元凶たる魔王を倒して欲しいと頼まれる。

召還されたショックで何も言えない内に勝手に祭り上げられ、気が付いたら流されるままに勇者にしか抜けない聖剣を引き抜いた。

そのせいで断ろうにも断れず、おまけに魔王を倒したと証明出来ない限り、元の世界に帰れない（帰さない）と宣言される。

仕方なく頼れる仲間と共に魔王退治の旅に出たのはいいけれど、旅の合間に聞いた魔王の恐ろしさにすっかりびびってしまい、こんな自分に魔王を倒せる筈が無いと思つて時折旅の最中にこつそりと泣いていたらしい。

そうして泣いてる勇者を叩撃したのが、彼の旅の目的である魔王本人であると言つから笑える。

皮肉な巡り合わせに、中々不愉快な気分になつた魔王であつたが、魔王は本来人間達の間で伝えられている様な残虐な氣質の持ち主ではなかつたので、不運な勇者の気持ちを思いやつて軽い溜め息を吐くだけに留めた。

「 と、いう訳なんですか。ぐすつ、ずず

「……そうか。なかなか勇者も大変なのだな」

これまでの遍歴を思い出して、再び泣き出した勇者の頭を宥める様に撫でながら、魔王はフードに隠された琥珀の双眸を細めた。  
今まで魔王討伐にやつて来た歴代勇者達は『勇者』という選ばれた者であつたことに過剰に自信をつけた勘違い野郎共であつたために、返り討ちにしてやる事になんら罪悪感など感じなかつたのだが、今代の勇者はどうも違つらしい。

初めての異世界産勇者であるせいか。

そもそも、何故に今代の勇者は異世界人なのだろう。

この世界の者が魔王を憎むのは理解出来るが、全く関係の無い異世界人に魔王討伐を頼むなど、どうにかしている。

「もう泣き止め。ここで泣いているよりは、さつさと魔王でも何でも倒してお前のいるべき場所に帰る事だけを考えていろ」「で、でもっ！ なんか色々と調べたら、元の世界に帰れる様な方法は無いみたいで……」

「は？」

旅をしている間に、勇者本人も様々な文献やら賢人と呼ばれる人々に話を聞いていたらしい。

そうして調べた結果、元々異世界の勇者候補をこちらの世界に呼び出す事は出来ても、勇者を元の世界に戻す様な方法は無いのではないか、という結論が浮上したのだと。

「それは……酷いな。勝手に喚んだ挙句、還す方法がないなど」

「うう……。そう思いますよね、やつぱり」

魔王が思う以上に、今代勇者の取り囲む環境は過酷であった。

今度は隠さずに重い溜め息を吐いた魔王に、勇者がびくびくと震える。

先程も思つたが、どうも勇者といつより小動物みたいだ。

「わかつた。ここで会つたも何かの縁だ。後の事は気にせず、お前は魔王を退治する事だけ考えていろ」

「え？ で、でもっ！」

「いいから」

何事かを言おうとしている勇者の田元を覆つて、暗示をかける。

「お前は此処で誰にも会わなかつたし、何も喋らなかつた いいな？」

「は、え？ で、でも…… はい」

泣き虫でも、さすがは勇者といったところか。

常人ならば逆らう事が出来ない魔王の力に暫く抵抗してみせたが、結局は精神的な疲れといった要素もあって、魔王が手を離すと大人しく頷く。

ギクシャクとした動きで村へと戻る勇者の後姿を見送ると、魔王は地を蹴つて宙へと舞い上がり、城を目指した。

## 一方的な邂逅く後編>（後書き）

これにて魔王様の回想終わりです。  
次話で元の時間軸に戻ります。

## 魔王の企み

勇者と出会った後の魔王は、それはもう精力的に働いた。

魔王補佐である藍玉を人間に化けさせ“僧侶”として勇者一行の中に潜り込ませた。

目的は勇者の護衛と監視、それと計画通りに勇者一行を動かすための調整役として。

配下の魔族の中から、特に優れている者達を勇者召還を行つた王国へと侵入させ、異世界干渉のための秘術について調べさせた。

目的を果たした勇者が無事に元の世界に戻れる様に送還の術を作らせ、一度と同じ事を起こさせない様に既存の術を使用不可能とするために。

更には魔王が持つ強大な力を練つてもう一人の“魔王”とでもいうべき、精巧な人形を拵えた。

倒されではならない、自分の代わりに倒されるべき存在として。

この計画で重要なのは“異世界から召還された勇者が、魔王を討伐する事”。

しかしながら、王として民を残して死ぬ事は出来ない。

そのため自分そつくりの身代わり人形を作つて、それを勇者に“魔王”として討たせることにした。

以上の事をやり上げて後、魔王は勇者を自らの城へと招き入れる事を決断する。

まず藍玉にその事を伝え、勇者達を魔王城へと連れて来させる。

魔王城内に魔王配下の魔族がないと変なので、やはり魔王が作った魔族そつくりの人形達を城に置き、代わりにそれらと勇者を戦わせた。

そうして、仕上げに勇者と身代わり“魔王”を戦わせ 討たせた。

あまりにも完璧な計画に、その計画を立案し、実行してのけた魔王本人はうつとつしたのだが、その配下である藍玉はそうではなかつた。

\* \* \* \*

「 なに悦に漫つてゐるのですかっ！…」

「 おおう。なんか物凄く怖いぞ、藍玉」

眉を吊り上げ憤怒の表情になつた藍玉は、元々が非常に美しい容姿をしてゐるがために、とても恐ろしかつた。

普段は冷たく理知的な光を宿している藍色の瞳は血走り、額には青筋が浮かんでゐる。

「 言わせてもらひますが、この計画のどこが完璧なのです！？」

「 聞き捨てならんことを言つた。立案者のオレでさえ、余りの出来の良さに自分を贅美したところに」

「 結果として陛下がそのようなお姿になられた時点でそれは失敗です！！」

「 びしつ！ と人差し指で恐れ多くも魔王陛下を指差しながら、藍玉は叫ぶ。

「 ……この姿の事を言つてゐるのか？ 可愛いだろ？」

につこりと微笑んで、その場でくるりと魔王がターンする。

二十歳前後の大人の姿でされたら少しばかり敬遠するその仕草も、今のは十代の子供姿である魔王であれば可愛らしい。

その言葉に、藍玉が苛立たし気に髪の毛を搔きむしる。やや乱暴な仕草だが、彼がやればそれすら麗しく見えた。

「姿は二の次です！ 私が言いたいのは陛下の御力についてですっ！」

「……それは仕方あるまい。さすがのオレとて、今回の件はかなり苦労したからな」

本来の魔王の姿は勇者が出会つた、二十歳前後の男とも女ともつかぬ中性的な魔性の美貌の持ち主だ。

腰まである長い黒髪は光を吸収するようديて、深い叡智を宿した瞳は金の色を帯びた琥珀色。

標準よりも背は高いが華奢で、細い体躯の持ち主

それが

魔王であつたのだが。

「随分と力を使つてしまつたからな。器たる肉体がこのようになつてしまつたのも……仕方あるまい」

少女とも少年とも判別出来ぬ、美の極致とも言える麗々たる中性的な容姿。

肩に辛うじて掛かる程度の短い黒髪と金色がかつた琥珀の瞳。

十歳の人間の子供程度の背格好で、美しさよりも可愛らしさがやや強い

それが現在の魔王だった。

おまけに、その気があれば世界さえも一瞬で滅ぼせるのではないが、と囁かれていた魔王の強大な力は綺麗に失せ、能力の点について

てだけ言えば下つ端魔族と同レベルにまで低下していた。

「これでは実質、魔王陛下が討たれたのと同じ変わらないではないか」  
「まあ、やうとも言えるな」

暢気な魔王の言葉に、藍玉は大きく溜め息を吐いた。

## 勇者凱旋・1（前書き）

別名、魔王陛下の暗躍。  
勇者凱旋後の話です。

魔王。

今では人間の最大の脅威といふことで、畏怖と恐怖でもって語られる相手でこそあるが、その存在の詳細について我々が知る情報は、極めて少ない。

……そもそも魔王と言つ存在について、どれほどの者が知っているのであらうか。

我々が知りうる魔王についての情報と言えば、彼の王が光を吸い取る闇そのものの黒髪を持ち、金色の光を帯びた琥珀の瞳をもつ、男か女かも判じない美貌の持ち主であるという事とあまりにも強大な力を持ち、その力でもつて過去何度か起こつた争い全てに勝利して来たという事だ。

筆者も一度だけ、彼の存在をこの目で見た事がある。

腰まである長い黒髪を風に靡かせ、その琥珀の両眼で眼下を見下ろし魔族を従えていたあの姿を脳裏に思いこすだけで、今でも甘美なる戦慄に襲われる。

……話を戻そう。

つまり所、筆者が言いたいのは魔王という存在に関して我々が知りうる事は、彼の者の脅威に比べると驚く程少ないと言う事だ。

旅の最中に出会つた某・魔族に魔王について聞き出した所、魔族であつても彼の存在についての情報量が我々人間と同じ程度であつたというのだから、これには筆者も驚いた。

ただ誇らし気にその魔族が語った事には、

「彼のお方は正しく我らの母であり、父である方である。無条件で愛情を与えてくれる親について子がそれ以上の事を知りうとするのであるうか、いや、ない」

との事で、魔王の性別でさえも魔族は知り得ず、それでいて魔王を第一の両親ともいいうべき存在として崇めている事実が判明した。

上の某・魔族の陶酔具合からも分かる様に、魔族に取つては彼らは自分達の敬愛すべき存在であり、庇護者であるからこそ、魔族達はそれ以上の事を知らなくとも構わないのだ。

しかし、魔王を最大の脅威と見なしている我々人間の立場からすれば、これは由々しき事態である。

敵を知らなければ、その戦は負け戦となる可能性が非常に大きい。そのためにも筆者の短き一生涯を書いて、私は彼の魔王とそれに従う魔族達についての出来うる限り詳細な記録を取り続けようとした。のペンをとつた。

『人から見た魔族についての一考察 アーデル・シュタインベルツ著』

序章より抜粋。

\* \* \* \*

「此所にいたのですか、勇者」

「…………僧侶さま？ どうしましたか？」

城の図書室で、古書のページを捲っていた手を休めて勇者と呼ばれた少年が振り向く。

開かれた扉の先にいるのは、勇者の仲間でもあり、一緒に魔王を

討伐した僧侶であった。

「国王がお呼びですよ。おそらく昨日の件に関してでしょ?」

穏やかな屈いだ声で僧侶が告げた内容に、勇者が顔を曇らせる。未だ青年の域には届かぬ少年の憂いに、僧侶が眉間に皺を寄せた。

「如何しましたか? 何か、不満でも?」

「いえ。ただ、僧侶さま……」

勇者は知っていた。

これまでの魔王討伐の旅の間に彼自身が調べた情報によると、異世界から物を招き寄せる事が出来ても、それを元の場所に戻す術は存在しないという事を。

長い旅の末に、勇者が凱旋したのはつい昨日。

望みの物は全て与えると告げた国王に勇者が願ったのは元の世界へ返して欲しいと言う切実な願いであったが、それが実現する事を勇者は半分諦めてもいた。

「 つち。この様な餓鬼に何故魔王様は……」  
「 僧侶さま?」

暗い面持ちで沈んでいた勇者の耳に、僧侶が何事か呟いたのは聞き取れたが、内容は分からなかつた。

不思議に思い、勇者は顔を上げたが、僧侶はいつもの穏やかな笑みを浮かべていただけだった。

「では、参りましょう。勇者」

「あ、はい」

穏やかだが断固な意思のこもった声に促され、勇者は席を立て、僧侶の後に従つた。

**勇者凱旋・1（後書き）**

藍田さん、色々とお手伝いして下さい。

## **勇者凱旋・2（前書き）**

魔族の名前は漢字ですが、人間はカタカナです。

そもそも、魔族という種は元々は存在しなかった。

今現在、この世界には四つの種族が存在する。

一つは筆者も属する人間族。

四種族の中でもっとも寿命は短くとも、その分繁殖力に長けた種族。

二つ目は精霊族。

木の精霊族エルフや土の精霊族ドワーフなど、細かく分類すれば多岐に渡るもの、彼らを大まかに分類すれば世界の元素に属する精霊族として纏められる。

三つ目は、今は去りし神族。

世界を想像したと伝えられる彼の種族は、遙かなる大昔にこの世界から去つて新天地を目指したとされ、今この世界に残るのは彼らの残した遺産のみ。

そうして、最後の種族が魔族である。

しかしながら、旧き書物を紐解いたとしても『魔族』という種族は表記されていない事が多い。

それは何故か？

その答えは、魔族と言つ種族が元々は『混ざり者的一族』まわりもの一族略して『混族』とされていたからだ。

彼らは元々、精靈族同士の混血児や人間と神族の間に出来た半神半人であった。

異なる種族の間に生まれた混血児は、他の種族に迫害される事も多々あり、特に古き血を尊ぶ木の精靈族エルフに於いては、生まれて来た混血児は母子共々殺害などといった乱暴な仕来りしきたりも存在した。

この様に、半端物・混ざり物と馬鹿にされ、迫害される傾向にあつた混血児達を、いつの間にか纏め上げたのが魔王であるとされる。彼の存在は三千年程前から書物に記載される様になり、旧き伝承によれば神族と剣を交えた事もあつたらしい。

『混ざり物の一族』が『混族まやく』から『魔族まやく』と称される様になつたのは、おそらく魔王と言う存在があつた事が原因に違いない。

しかしながら、魔王という存在がどこからやつて来て、何故『魔王』となつたのか判明しておらず、未だ最大の謎のままである。

『人から見た魔族についての一考察 アーテル・シュタインベルツ著

## 第一章　＝魔族と言つ種について＝　より抜粋。

\* \* \* \*

「おお……。では、これが伝え聞いた魔王の御佩刀みはかしで間違いないのだな？」

興奮した男の声が、広い室内に響き渡った。

「……はい。勇者と共に魔王討伐に参加した我々が、魔王討伐の証として持ち帰つた魔王の遺物に間違いありません」

「…………陛下。近くに寄られて御確かめください」

豪奢な飾りが至る所に施された室内にいるのは、勇者をこの世界に呼び出した魔王と宰相、そして魔王討伐に参加した女魔法使いのみ。

宰相に促され、魔王が震える足取りで真紅の天鷲絨に包まれた“それ”を覗き込む。

最上級の天鷲絨の上に無造作に置かれた漆黒の剣こそ、この度討伐された人間の最大の脅威・魔王の愛剣であった。

夜空の様に艶めく、漆黒の刀身は神秘的な輝きを宿し、柄に嵌められた大粒の琥珀が光を帯びてとろり、と煌めく。

生命を奪う筈の武器であるのに、至上の芸術品の様な麗々しい姿に、国王は魅入られた様に目を奪われた。

「おー、おー。これぞ正しく、あの忌々しい魔王の剣。まるで彼の魔王そのものだ」

「魔王の体は勇者の聖剣に貫かれ灰となりましたが、異形化するまで魔王の使っていたこの魔剣を証拠として回収する事には成功致しました」

「ふうむ。成る程……」

小さく頷きながら、魔王が魔剣に触れようと手を伸ばす。

その指が柄に触れるや否や、その手が電撃の様な物によつて弾かれた。

「なつ……！」

「ご注意ください、陛下。それはまさに魔王の一部の様な物。我々の手では、触れる事すら許されませぬ」

「忌々しい魔王めがー！」

国王が吐き捨てる。

人間族の国王をして生まれながらにほぼ全てを手に入れていた彼にとって、東に霸を唱える魔王は長年の憎悪と憧憬の対象でもあった。

戦場で数度まみえた、彼の魔性の美貌を持つ王の姿を思い描き、苦々しい気分で歯ぎしりする。

そんな王の姿を宰相と女魔法使いはじつと見つめていた。

「怒りを御鎮めぐださいませ、国王陛下。この度の異世界出身の勇者の手によつて、既に魔王は滅ぼされたのです。それに、ほらご覧下さい」

宰相が後ろに控える女魔法使いに田配せをする。

女魔法使いは、部屋の隅に設置された細長い箱を持って来て、魔劍の側へと箱を置き、徐おもむろに引き開けた。

「それは、勇者の聖剣……」

魔王の剣とはまた違ひ、白銀の清涼な輝きが国王の田を焼いた。

魔劍と比べると、細身でしなやかな剣。

古の伝承によれば、嘗て魔王と剣を交えた神族の残した物と言わ  
れている剣が、魔劍の側に寄せられると、錯覚でもなく魔劍が震え  
た。

柄に嵌められた大粒の琥珀が、弱々しい光りに変わる。

「いひして聖剣の側へと置けば、この剣は力を失います。陛下、  
もう一度御試しぐださい」

「……ふむ。確かに

象嵌された琥珀へと国王が再び手を伸ばすが、先程の様な衝撃は襲つて来なかつた。

その事実に満足した国王の顔が緩んだ。

『失礼致します、國王陛下。勇者様と僧侶様がお見えになられました』

聖剣という威を借りつつも、魔剣をひいては魔王を屈服させたという事実に心を奪われていた国王は、外部から扉がノックされる音で我に返つた。

名残惜し氣に剣を撫でていた手を放し、威厳に満ちた声を出す。

「許す。入つて来るが良い」  
「失礼致します」  
「失礼します……」

一礼して、僧侶と勇者が室内へと足を踏み入れた。

## **勇者凱旋・2（後書き）**

人間族の国王陛下の話でした。  
魔王様の出番はまだです。

## 勇者凱旋・3（前書き）

僕田 = さかつた  
藍玉 です。

魔族率いる魔王が、秀でた武勇の持ち主であると言つのは周知の事実だ。

實際、過去幾度か起つた数々の対・魔族の戦に於いて、彼の王は時折姿を現している。

一人間の筆者としても悔しい事に、魔王の武芸は正しく一騎当千の強者と称するに相応しいものだ。

いや、時には千の軍隊どころか、万の軍勢相手に怯む事無く戦いを挑む姿は、敵ながらあつぱれと賞賛する他無い。

人間の猛者相手に、体格では一段どころか二段も劣りそうな華奢な体躯の魔王が、軽々と鎧を纏つた騎士を放り飛ばした話など、耳に胼胝が出来る程聞かされた物だ。

……どうにも話が脱線してしまった、話を戻そう。

綺羅星(きらほし)の如く煌めく魔王の武勇伝の中で最も有名な物は、今は既にこの世界を去つた神族との一騎打ちだ。

神族の中でも特に武勇に優れ、軍神と謳われた“柘榴旋風”。

千の強者を屠り、万の怪物を降したとされるこの軍神と魔王が戦つた場所は、今では深い渓谷となつており、往事の争いの凄まじさを物語る。

七日七晩続いたとされるこの争いは、軍神の隙を突いた魔王の勝利で幕を下ろしたと伝えられている。

愉快な事に、想像遅しい研究者の中では、この戦いが神族がこの世界を去つた原因となつたのではないかと考えている者がいる程で

ある。

筆者としては、『軍神』と言えども、たかが一神族に過ぎぬ相手が負けたという一件のみで、神族全体がこの世界から立ち退いたと考えるには暴論が過ぎると考えている。

補足だが、この軍神“柘榴旋風”<sup>ペルメーリヨ</sup>が残した剣は後に人間族の作った王国の所有物となり、現在では勇者の聖剣として世に名を知らしめている。

『人から見た魔族に対する一考察 アーデル・シュタインベルツ著  
第一章 “魔王伝説の真偽” より抜粋。』

\* \* \* \*

「招きに預かり参上致しました。それで、王様。ボクに何の御用ですか？」

「済まないな、勇者。英雄である其方を呼び出すなどして」「英雄つて、ボクはそんな立派な存在では……」

途端に口内でも「もじ」と言葉にならない言葉を紡ぐ勇者を見ていると、苛々する。

最も顔には出さないが。

今は勇者一行の一人、僧侶としての姿をしている藍玉は胸中で舌打をした。

今この広い室内にいるのは、藍玉と勇者、国王と宰相そして女魔法使いの五人のみである。

そして藍玉と勇者を呼び出した国王の前に置かれた物体を見て、苦々しい気分になる。

魔族の王・魔王の一部とも言える漆黒の御剣。みづくのけん

対極とも言える白銀の輝きを宿した聖剣と対になる様に置かれ、象嵌されている大粒の琥珀が弱々しく輝いている。

彼の王の腰に佩かれていた時は、他の如何なる宝玉も敵わない程煌めきを放つていたといったのに。

「ところで、勇者に何か御用があつたのではありませんか？」

「ああ……。そうだったな」

呼び出した勇者そつちのけで魔剣を見つめていた国王に声をかける。

下位の者が国王に直接声をかけると言う無礼を犯した僧侶姿の藍玉を宰相が睨むが、素知らぬ顔で無視した。

「勇者、お前が昨夜私に言つた願いの事なんだが……」「元の世界には、還るのは無理なので……しょうか？」

弱々しい響きの少年の声。

こんな餓鬼のために魔族の王である魔王が手を打つてやつたと考えるだけで腹が立つ。

「…………その事に関してですが、陛下。少々、お話を」

不意にそれまで押し黙っていた女魔法使いが口を挟む。むつとした様に宰相が今度は女魔法使いを睨むが、淡々とした表情のまま、女魔法使いは言葉を続けた。

「私も昨晚知り得たのですが、どうやら塔の魔法使い達の間で勇者

殿の願いを叶える事の出来る術が完成した、と

人間族の中の魔法使いとしての才能を持つ者は国家直営の魔法使い管理組織・塔に属して日夜新たな術の研究を進めている。この度異世界から勇者を召還した術とて、元々は数百年前の術を改良した物であった。

「つまり、異世界送還の術が完成したという事が……？」  
「左様でござります、宰相様」

ふるふると勇者の体が小刻みに震えている。  
未だ青年の領域に届かぬ少年の両手が、控えていた女魔法使いの手を握りしめた。

「ほ、本当なんですか！？ ボクは元の世界に還れるんですか！？」  
「そ、その通りです。術は完成しており、今夜にでも発動出来るとの事です」

「よ、良かったあ。ありがとうございます、魔法使いさん！」

無邪気に笑つた勇者から顔を背けて、女魔法使いが耳を赤らめる。

「べ、別に貴方を喜ばせるために教えた訳じゃないんですからっ！」

なんだ、この三文芝居。

国王と宰相と言つ国ツートップの前で繰り広げられた茶番劇に、藍玉は僧侶としての仮面を忘れて溜め息を吐きたくなつた。

## 勇者凱旋・3（後書き）

ツンデレって難しい。

神族の名前は漢字四字にカタカナのフリガナ。

魔王という呼称が意味する物はなんなのであらうか？

筆者は以前、混血児の集団であった『混族』は、魔王という統率者を得て『魔族』になつたと書いた。

“魔”という一文字には、不思議の力、神秘的なもの、恐るべきものに対する畏敬と恐怖、憧憬そして羨望が込められている。この一字には悪事を為す存在に對して付けられる“魔”という意味も、魔王と言つ呼び名には含まれられているのであらうが、成る程彼の存在に相応しい呼称とも言える。

少し話は変わるが、魔王が魔王として歴史の表舞台に姿を現したのは、おおよそ一万年前だとされている。

しかしながら、発掘された古代遺跡から出土した資料から、時折魔王らしき存在についての描写が発見される事もあるため、もしかしたらそれ以上長い時を生きている存在なのかも知れない。

その証拠に、魔族達は自分達が敬愛する魔王の事を「初代であり、永代たる我らが王」と呼ぶ事実がある。

この言葉が指しているのは、彼の王が我々人間族の王や精霊族の長老達とも違い、一度も代替わりする事無く魔族を支配し続けてい る、という驚愕の事実である。

もしかしたら、我々他種族が知り得ないだけで、魔王は代替わりしているのかもしれないが、それにしては歴史に姿を現す魔王の存在はあまりにも統一され過ぎている。

現在最も長命種である木の精霊族であつても、寿命は千年程度。

エルフ

その木の精霊族以上に長命であったのは、今は去りし神族のみであるが、魔王が神族ではないのは周知の事実である。

となると、彼の王もやはり他の魔族同様、異種族婚によつて生まれた存在なのか？

……これは筆者の推論でもあるのだが、魔族率いる魔王は『混族』であった。『魔族』を支配する者でありながら、異種族の交わりによってこの世界に生まれ落ちた存在ではないのかも知れない。ある意味、四種族のどれにも属さぬ第五の種族……かも、しれないのだ。

全て筆者の憶測、いや妄想に過ぎないのだが、こうして調べを進めていく内に、筆者自身、この突拍子の無い考えを否定する事が出来なくなってしまっているのが現状である。

この様な事例も、彼の王を魔王とするに相応しい神秘性の象徴とも言える。

『人から見た魔族に対する一考察 アーデル・シュタインベルツ著 第一章 ＝魔王伝説の真偽＝ より抜粋。』

\* \* \* \*

「今宵、勇者は元の世界に還られる。皆の者、我が国の、いや世界の英雄を盛大に見送らうではないか！」

重厚な響きの国王の声が、豪華絢爛に飾り付けられた大広間全体に広がる。

国王の言葉を受け、それぞれ贅を尽くした衣装を着こなした貴族

達が一斉に壇上の勇者一行へと拍手を送った。

鼓膜が割れんばかりの拍手喝采を受け、今晚の宴の主役たる勇者は気圧された様に戦った。

「勇者様、勇者様」

「おめでとうござります、勇者様。彼の悪名高き魔王を討ち滅ぼしてくださつて……」

「榮誉ある凱旋式なのですから、もう少々この国に御留まつになつて下さつても」

「よろしければ私の娘などは如何です？ 元の世界の事など忘れさせて差し上げますよ」

魔王の言葉が終わるや否や、居心地悪そうに身動きしていた勇者に一斉に人々が群がる。

勇者だけでなく、他の魔王討伐の英雄達、弓使いや女魔法使い、果てはまだ子供の盗賊にも貴族達は声をかけていた。

穏やかな笑みで追従の言葉を躊躇しながら、僧侶に扮している藍玉は失笑を堪え切れなかつた。

「僧侶様……。よろしければ今度我が伯爵家にいらしてくださいませぬか？ 是非ともお話を賜りたいのです」

「あら。伯爵家風情が何を仰っているのかしら。英雄たる僧侶様に話しかけるなど、身分を弁えていいのでなくて？」

「ほほ……。ついでござりますわ、僧侶様。この度田出度く勇者となられたのです。還俗をお考えにはならないのですか？」

隙あれば自分達との縁故を結ぼうとする人間達を、心中で嘲笑する。

ここに居る全員が魔王が討伐されたと信じ込んでいるのだから

そんな中、一人の貴族が大声を上げた。

「おそれながら、陛下。俄には信じられませぬな。今まで散々我らを苦しめて来た魔王がこんなにもあっけなく滅ぼされたというは」「剛毅で知られる公爵らしい言分だ。しかし……」

「ああ、一理ある。本当に彼の魔王は滅ぼされたのだろうか?」

声も高らかに、公爵の一人が懷疑的な口調でそう言い放つと、周囲の貴族達はそれを批判しながらも同意する様に口々に囁きあう。その様子に国王は気分を害する事無く、むしろその言葉を待つていた様に立ち上がった。

「公爵、其方の言う事も最も。しかし余は彼の魔王を勇者達が討ち滅ぼしたと言う確たる証拠を持つてある。宰相、あれを」「はい」

国王の命を受け、宰相が振り返つて部屋の隅に控えていた侍従達へと命じる。

壇上に設置された細長い箱を覆つっていた濃紺の布が一斉に剥ぎ取られた。

「おお……！」

「まさか、まさかあれは……！？」

「魔王の愛剣ではないか！」

ガラスケースの中に設置された漆黒の剣を目にした貴族達が口々に驚愕の声を上げる。

中でも騎士として過去数度の対・魔族の戦闘に出向いた者達の驚愕はそれの比ではなかつた。

「あの漆黒の輝きを忘れはせぬ……！ 初陣の時に目にした魔王の剣そのものだ……！」

「応とも。しかしそうなると」

「やはり彼の王は勇者の手で滅ぼされたのか……」

一斉にその場にいる全員の視線が勇者へと集づ。勇者が恥ずかしそうに目を逸らした。

「誠に大儀であつた、勇者。其方の働きを我が國は決して忘れないだろ？」

「は、はあ。どうも」

困つた様に何度も視線をあちこちに走らせながらも、何かを待つてこる様子の勇者の姿に国王はその笑みを深くした。

「それでは、勇者。今度は我々が其方の願いを叶える番だ。異世界送還の陣を準備せよ！」

「国王の宣言に、勇者の愁眉が漸く開かれた。

何故、筆者は魔王第五種族説を考える様になつたのか。それは、この世界に存在する第四種族の特徴のどれにも魔王という存在が当て嵌まらないから、としか答えようが無い。

前述したが、この世界に存在するのは人間族・精霊族・（正確には存在した）神族・魔族の四種である。

人間族。

寿命は短くとも、その分繁殖力に長けた種族。

その他の特質として、精霊族の様に特に定まった属性を持たず、個人の資質によって操る元素が異なる。

精霊族。

世界を構成する第五元素をその身に宿した種族。

木の精霊族エルフ、土の精霊族ドワーフ、火の精霊族ドラゴン、風の精霊族シルフ、水の精霊族ウンディーネの五つに分類される。

長寿の種族である一方、それに反比例する様に新生児の出生率は低い。

人間とは違い、精霊族は元素を一種類しか操れない。例えば、木の精霊族エルフであれば植物、火の精霊族ドラゴンであれば炎など。

神族。

見目麗しい容姿と強大な力を持つた長命種。一節には不老不死の存在であつたらしい。

三千年前にこの世界より去り、新天地を目指して旅立つたとされている。

それぞれ司る物を持ち、それに則した能力を持っていたと伝えら

れているが詳細は不明。

### 魔族。

『混族』と蔑まれていたが魔王と言つ支配者を抱いてからはその庇護の元、発展を遂げて来た種族。

寿命、容姿などはそれぞれ自らの元となつた種族の特徴を受け継いでいるため、四種族中最もバリエーションに富んでいる。

人間の繁殖力、精霊族の長寿や能力、神族の生命力や見目麗しさ、などといった他種族の長所を受け継いで生まれてくる者が多い。

時には一親の能力を受け継いで生まれてくる者が大多数なため、一人の魔族が二つの元素を宿していることなど標準仕様であり、逆に一元素のみの方が稀であるとか。

そこで、我々の知りうる魔王の情報を統合してみたところ、四種族のどれにも属さぬ存在であると考える方が容易い。

彼の王の見目の美しさから神族ではないかとも考えられたが、それは神族の行いがそれを否定している。

神族同士の争いは厳格に制限されていたため、軍神であつた“真ベ  
紅旋風”との一戦は、魔王を神族でないと断定する良い証拠である。人間族であると考へるには、彼の王の異常なまでの生の長さからして即座に否定が可能だ。

精霊族、又は魔族であると考へるについても、彼の王が精霊族であれば一種しか仕えぬ第五元素を全て操るという時点で却下され、例え、混血の魔族であつたとしても扱える元素は最大で三種まで（それ以上を無理に操ろうとする元素同士の反発で肉体が崩壊すると考へられている）なため、魔族でないと考へるのが妥当だ。

しかし、魔族でもないとしたならば、何故彼の王は魔族の王としてこの世界に存在するのであろうか？ 疑問が尽きることはない。

『人から見た魔族に対する一考察 アーデル・シュタインベルツ著』

## 第一章　『魔王伝説の真偽』　より抜粋。

\* \* \* \*

大広間の中央に敷かれた、巨大な円陣。

円陣の中央には勇者の姿があり、円陣の外側には全身を五色の異なる色彩のロープに身を包んだ五人の魔法使い達が立っていた。

韻を踏んだ詠唱を揃って唱え、瞳を閉じてトランス状態へと入る。

やがて、長かつた詠唱が佳境に入つた頃、示し合わせた様に魔法使い達が両の手を円陣の中に入いる勇者の方へと差し向け、一際大きな声で唱和した。

この世界を構成すると考えられている第五元素が大広間に、正確には勇者を中心とした円陣へと密集していく。

緑、赤、黄、白、青の色を宿した光球が円陣へと吸収され、円陣が明滅を始める。その時が近い事をその場にいる全員に教える。

則ち、勇者が自らの世界へと還る瞬間を。

「良かつたね、勇者。これで元の世界に帰れるんだ……」

「ああ。あいつ、散々還りたがっていたからな」

魔王討伐の英雄である盗賊と使いが感慨深気に咳き合つ。

それに特に心動かされる事なく、藍玉は円陣の中で光りに包まれる勇者の姿をただ見つめ続けた。

円陣から発せられる光の明度が、徐々に上がっていく。来るべき瞬間に備え、その場にいる誰もが目を瞑つた。

「 つー！」

「 もやあつー！」

「 つむー！」

瞼を通して真っ白な輝きが視界を焼き尽くす。

光が消え失せた後、輝きを失った円陣の中央に勇者の姿は無かつた。

しかし、異世界より召還された勇者は、彼のあるべき世界へと帰還したのであった。

## 勇者帰還・2（後書き）

これにて勇者帰還終了。  
次は魔王暗躍です。

## 魔王暗躍・1（前書き）

漸く、魔王様のターンです。

「勇者、還つちゃつたんだね……」

「ああ。そのようだな」

僅かに涙ぐんでいるらしい盗賊と使いの言葉に尻田にて、藍玉は未だ明滅を繰り返す視界を必死に凝らして、大広間を見渡した。すっかり輝きを失った円陣に、それを囲む様にして立っている五人の魔法使い達。

一際高い所に設置された壇上の玉座には国王が座したままで、その脇には宰相が控えている。

そして彼らの前に置かれた細長いガラスケースの中には、大粒の琥珀が象嵌された漆黒の剣が深沈たる輝きを宿したまま鎮座していた。

「勇者殿は御還りになられた！ 皆の者、再度我が国の英雄達に感謝の拍手をしようではないか！！」

壇上の国王が何かを叫んでいるが、どうでもいい。藍玉はただ一人を探して、視線を彷徨わせ続けた。

そして。

「おい、僧侶殿。どうしたんだ、さつきからぼんやりして」「…………いえ、何でもございませんよ」

横から『使い』が心配そうに声をかけて来るが、適当に受け流す。彼の眼差しは、ただ一人に釘付けだった。

勇者の事にとても拘っていたから来ているだろ?と思つてはいたが、本当に来ていたとは。

見慣れない姿だが、強い既視感を覚えた相手。

十歳前後の背格好に、白のヘッドドレスを被つた後姿。

地味な色合いの茶色の紺仕服に白のHプロンドレスという格好だが、自分が見間違える筈がない。

唯じつと見つめていると、相手が自然な動作で振り返る。

一瞬だけ向けられた琥珀色の輝きと藍玉の視線が交錯する。

直ぐさまそれは反らされたが、藍玉にはそれだけで充分だった。

「後は貴方の思つがままに、我らが魔王陛下」

口中で呴いた言葉は誰の耳にも届く事無く、ゆっくりと大広間のざわめきの中に沈んでいった。

\* \* \* \*

宴は大成功としか言いようが無かつた。

その晩、いい具合にほろ酔い加減となつた国王は、上機嫌な気分のまま自室へと戻つた。

長年の頭痛の種であり、人間族に取つては建国の時からの目上のたんこぶであつた魔王が漸く滅ぼされたのだ。

この夜は国王に取つて、まさに人生最良の日であった。

人はとつくる昔に下がらせており、国王の自室には彼しかいない。

寝室のサイドテーブルに保管しておいた秘蔵の美酒を取り出して、瑠璃の盃にたっぷりと注ぐ。

「そのまま眠ってしまうには非常に持つたいないと国王が思つた程、彼の気分は良かつたのだ。

微かな甘みのある酒を口に含んで、ゆっくりと飲み干す。

強いアルコールが喉を焼いた。

さて、これからあの忌々しい魔王を失つた魔族共をどうしてくれようか。

「そのまま一気に軍を進めて、魔王を失つて混乱している魔族共を一息に蹴散らすも良し。

あの魔族の広大な領土を併合し、大陸一の大國として周囲に霸を唱えるも良し。

あの厄介な魔王をえいなければ、魔王に寄生していた魔族共などを恐るるにたらず。

どうとでも、それこそ魔王の思つがままに料理出来るといつものだ。

抑え切れない笑いが、唇を割つて外に零れる。

低い笑声が空氣を振るわす中、過去に数度目にした魔王の姿が魔王の脳裏に描き出された。

何度、あの魔王を自らの足下に跪かせたいと思つた事か。

何度、あの太々しい笑みを浮かべる王の顔を屈辱で歪ませてやりたいと思つた事か。

光を吸い込む様な長い黒髪に、不思議な輝きを宿す琥珀色の瞳。

男とも女とも判別出来ぬ魔性の美貌を持つた麗しき魔王。

あの姿を今後見られぬと思うと、それはそれで勿体無い様な気がしたが、建国当初からの人間族の積年の相手を葬る事に成功したのだ、これ以上を望めば罰当たりになるだらう。

火照つた頭でそんな事を考えていた国王の頬を、柔らかな風がくすぐつた。

風に頬を撫でられ、あまり回らぬ頭でぼんやりと考える。

……自分が部屋に入る前に、窓を開けただろうか。

国王がそう思つた途端、室内の明かりが一斉に落され、周囲が闇に染まつた。

## 魔王座躍・1（後編）

なんか魔王がヤハトレゼついたなや感……。

## 魔王座席・2（前書き）

『魔王陛下～』をお気に入り登録していくだせつて感謝します。

室内を突風でも吹き抜けた様に、部屋の中を照らしていた明かりが搔き消える。

真っ暗になつた室内で、国王は座していた椅子より立ち上がり、従者を呼ばうと口を開けた。

しかし。

「おっと。人を呼ばれては困るな」

一陣の風が頬を掠めたかと思うと、次の瞬間には床へと叩き付けられていた。

いや。

不意に現れた何者かの手に寄つて足払いをかけられ、胸元を強く押された事で床へと押し付けられたのだ。

「なつ、何者だ！ 余を国王と知つての狼藉か！？」

「そりやそうだとも。会いたかつたぜ、人間族の国王」

くすくす、と自分を床へと押し付ける何者かが、笑う。

笑みを含んだ、幼さの残る声。どこかで 聞いた事が無かつたか。

室内は暗闇に寄つて包まれ、自分に狼藉を働く輩の顔を見る事すら敵わぬ状況の中、国王は必死に頭を回転させる。

その瞬間、闇の中でとろりとした輝きを宿す極上の琥珀が瞬いた

事に気が付いて、愕然とした。

「きつ、貴様！！！ 貴様はよもや、魔王…………！？」

「応とも。なんていうんだっけ、『いつこう時』 地獄の底からやつて来たぜ？」

くつくつくつと喉のが鳴る音にて、国王の血の気が引いていく。

「馬鹿な！ 貴様は勇者の手に寄つて討ち滅ぼされたのではなかつたのか！？」

「おつと、あまり大きな声を出すんじゃない。オレが生きていると知られて困るのは……どっちだ？」

ぐつ、と喉を冷たい手で圧迫され、声を抑えつけられる。

国王が静かになつたのを確認して後、死んだ筈の魔王は再び口を開いた。

「そう、オレが死んだと発表したにもかかわらず、オレに生きていられたら困るのは他でもない、お前達だよな？ だつたら大人しくしておけ。オレはお前を殺しに来た訳じゃないからな」

勇者が去つた今となつては、魔王を討ち滅ぼしたと宣言した己の國が各國から非難され、國としての信頼を失つ事は間違いない。

俄に、喉のかかる圧力が弱まり、国王は咳き込んだ。

「オレの要求は只一つ。 オレの大事な子供達に手を出すな。

ただそれだけだ」

「子供……魔族共の事か」

「大方、オレがいなくなつたという事でオレの国に手を出さうとか

考えていたみたいだからな。釘を刺しに来た」

国王の目が段々闇に慣れて来た事で、視界が明瞭になっていく。至近距離で輝く琥珀の瞳は、獣の様に爛々と輝いて国王を見据えている。

「それさえ守ってくれれば、オレも何もしない。魔王が倒れたと広めたいのならば、広めればいい。倒された様なフリをしたのは確かだからな」

「つまり。今回の異世界出身の勇者の功績は勇者の自作自演であったのか？」

「違うって。オレがあの可哀想な坊やに倒されてやつただけだよ」

この世界より去った勇者の姿を思い起じし、国王が低く呻くと、魔王は呆れた様な声を出した。

「魔王」

「なんだ？」

「……貴様、その姿はなんとした」

「あ。バレた？」

闇に慣れた国王の両目が映したのは、確かに魔王の特徴である光を吸う様な黒髪に宝石の様な琥珀色の双眸であつたが、かつて数度目にした魔王の姿と違っていた。

腰まであつた、光を吸い込む様な黒髪は肩までの長さに。

鋭さを帯びた琥珀色の双眸は、色は変わらぬものの丸さを帶び。

男とも女とも分からぬ魔性の美貌に浮かぶのは、美しさよりも可愛らしさの方が強い。

「働き過ぎた副作用って、とかかね？ 勇者のやつた事も、あながち無駄ではなかつたつてことさ」

魔王は弱体化している。

その事実が国王の脳裏を駆け巡る。

そうして国王が思つたのは、この状態の魔王ならば、もしかしたら自分の手で止めをさせのではないのか とこうある種の甘美なる誘惑。

そろり、と国王の手が隠し持つてゐる懐剣へと伸びる 前に、小さな手に掴まれた。

「おつと。命が惜しかつたら余計な真似をするんぢやない。オレが素手で人間の喉位潰せるのは知つてゐるだろつ……？」  
「ぐつ……」

ぎりぎり、と小さな手に似つかぬ怪力で手首を締め付けられ、国王が痛みに唸る。

以前、魔族の女性相手に乱暴を働くつとして腕をねじ切られた人間族の兵士の姿が脳裏を横切る。

「……そう、いい子だ。大人しくしてろよ、人の国王」

低い笑声に、背筋に戦慄が走る。

生まれながらに四種族の一つ・人間族の王として守られて來た国王には今まで縁遠かつた、死への恐怖が国王を襲う。

目の前の、子供の姿となつた美しい怪物は自分を簡単に殺す事が出来るのだ。

畏れずには、いられなかつた。

「余を……殺すつもりか？」

「は？ んな、面倒な事を誰がするかよ。お前が戦勝式の翌日に殺されてみる。とほりちりがオレの大変な子供達に行くにだらづが」

国王の震えた声の問いかに、馬鹿馬鹿しいと肩をすくめると魔王は身じろいだ。

「 警告はしたからな。余計な真似を済んじゃねーぞ」

最後に低く、低く宣言すると、魔王の上にかかっていた魔王の重みが無くなる。

圧迫感から解放された魔王が部屋を見渡した時には、小さな魔王の姿は消え失せていた。

## 魔王帰還

闇夜に浮かぶのは、仄かな橙色の燈火を灯す白亜の城。

世界の四題種族のうち、人間族の王の住まい、鉄壁の防御を誇る  
と謳われているその城内。

夜空に浮かぶ真円なる満月とその周囲に散らばる銀の真砂の様な  
星が照らし出す下、踊る様に歩を進める小さな人影があつた。

とん、とリズミカルに白亜の床を踏んで、軽やかに飛び上がる。  
ゆうるり、と質素な作りの服に身を包んだ手が伸びて、空を切る。  
ぐるり、とステップを踏むと後ろへと優雅に回つてみせる。

白のヘッドドレス<sup>○</sup>そないものの、服は正しくこの城で働くメイドの物。

簡素な作りの茶色の給仕服と真っ白なエプロンドレスが、人影が  
舞う度に軽やかに揺れる。

「…………機嫌ですね、魔王陛下」

「やあ、藍玉。お前は不機嫌だな」

舞台で観客を魅せる踊り子の様に、月下の下で舞う人影に声をかけたのは不機嫌そうな僧侶。

しかし、眼鏡を外してやや乱暴に髪を梳くと、整った顔立ちながらも何処か地味な雰囲気の青年の姿は、銀の混じった灰色の髪に冷たい光を宿した藍色の瞳を持つ怜俐な美貌の青年へと姿を変える。

「ふふふ。これでとにかくオレのすべき仕事は終わったなあ、と思  
うと、それだけで心が浮き立つというものだ」

舞を止めた、全てが完璧に形作られた美の極致の様な爪先が、ゆっくりと空を掴む。

実体のない何かを掴もうとする様なその動きに、それまでじっと見守っていた藍玉が溜め息を吐いた。

「何を恍けた事を言つていいのですか。魔王陛下、貴方は勇者が来るからと書いて全て後回しにしていた書類の束がどれほどあると思つておられるのですか？」

「え？」

きょとん、と子供ながらも魔性の美貌を宿す面差しが驚きに包まれる。

「少なくとも、今現在の陛下の身長を超える程度の書類の束は山ほどあります。…………どうやらお忘れだつたよつで」

「うつそ！ なにそれ、オレ聞いてない！？」

「初代にして永代たる我らが魔王陛下の事ですから、すでにご存知であつたかと思っておりましたが、私の連絡マネスのようですね。うつかりお伝えするのを忘れたようです」

につこり、と田だけが微笑んでいない笑みを藍玉が浮かべると、魔王は大袈裟な動きで頭を抱え込んだ。

「うつかり……つて。お前、そんなキヤラじやないだろ？ が……。

完全に勇者の件を根に持つてゐるな

「何かおっしゃいましたか、魔王陛下？」

「いーや、なにも。…………昔はあんなに素直で可愛かつたのにな

「あ

唇を尖らせ、完璧に拗ねた子供用な仕草をしている魔王は魔族の中で最も長寿な存在である。

そのため、現・魔族の誰もの幼い頃の姿を見知っていた。

『陛下』

「塔へと侵入させておいた子供達か。頼んでおいた術式破棄は叶つたか？」

『当然です。異世界召還の術並びに帰還の術、全て破壊致しました』  
「(ノ)苦労様。さすがはオレの自慢の子供達だ』

周囲に誰もいないにも関わらず、一人に 厳密には魔王へと声がかけられる。

夜の風に紛れてしまいそうな忍び声の持ち主を、魔王が弾んだ声で賞賛する。

愛しさの滲んだ声で誉められ、姿の見えぬ声の主が照れた様に沈黙した。

「さて。第一の異世界産勇者が誕生しない様に手は打つたし、なんか藍玉は怖いし、オレもそろそろ城に帰るとするか」

「人間族の国王はあのままでよろしいのですか?」

「まあ、いいんじゃね? わざわざおおっぴらにして、盛大に恥をかく様な趣味は持つていらないだろ(ノ)」

心底どうでも良さそうに、魔王がひらひらと手を振る。

尚も言い募る(ノ)とする藍玉を琥珀の視線で制すると、魔王は藍玉へと小さな手を伸ばした。

『そら』

『……なんですか、この手は』

『飛んで帰るんだろ? オレも連れてけ』

「失礼ながら、陛下は空を飛ぶ術を習得している筈では？」

「勇者に倒されてやつた副作用で満足に力を使えないんだよ」

はあ、とわざとらしい溜め息を吐いて、藍玉が子供姿の魔王を抱え上げた。

## 魔王帰還（後書き）

これより第三部になります。  
「魔王城の新たなる日常」へと移ります。

### 16章（福音）

新章の開始です。やいせじるがで来ました……！

奇形の鳥が飛び交い、暗雲渦巻く暗黒の城 魔王城。

異世界より魔王討伐のために呼び出された勇者が訪れた際には、おどりおどりしい姿を見せていた彼の魔王の城は、勇者が去った後、その姿を一変させていた。

濁つた闇色であった城壁は、深い藍色がかつた晴れ渡つた夜空の色へ。

どんよりと立ち籠めていた重たい雲は消え去り、清涼な風が城内から流れ出している様で。

飛び交っていた奇形の鳥達は、どこからひとつ見ても無害な小鳥へと様変わりしていた。

人間族が誇る鉄壁の防御の白亜の城と同じ、いや、それよりも遥かに巨大で壮麗な夜色の王城。

それが本来の魔王城の姿であった。

\* \* \* \*

すっかり元の壮麗な姿を取り戻した魔王城内、その奥の奥、深部の深部。

勇者との最終決戦の場となつた魔王の謁見の間にて集まつた城内の魔族全員を前に、魔王補佐である藍玉は冷えきつた声音で言い放つた。

「こちらが、我らが王であらせられる魔王陛下の現在の姿でござります」

見る者を威圧する様な漆黒の玉座に座して、少々居心地悪そうに縮こまるのは小さな人影。

肩までの光を吸い込む様な黒髪と深沈たる輝きを宿した琥珀の瞳。黒を基調に金糸や銀糸をふんだんに使用した華麗なる衣装に身を包んだ、男とも女とも判断出来ぬ中性的な容姿。

一歩間違えれば派手と思わせてしまう衣装を見事に着こなし、それでいて決して負ける事の無い魔性の美貌の持ち主。

言わずもがな、魔族を統べる唯一の存在である魔王であつた。

「あー。その、済まんな。ちょっと勇者と戦った際に力を使い過ぎた……」「

居心地悪そぞろに玉座の上で身じろぎしながら、魔王は正面で跪く魔族達へと弁解する様に呟いた。

その脇に佇んでいた藍玉は常の如く無表情を保つたまま、固まっている同胞共へと声をかけた。

「因みにドッキリとかではありますんで、あしからず

藍玉がそう告げると、固まっていた魔族達の間から悲鳴が上がった。

「そ、そんなっ！ 我らが魔王陛下が子供のお姿になられたんだんて……！」

「ちょっと待て！ 縛ら陛下が色々と規格外だとしても幼児化するとは……！ 実は陛下の隠し子ではないのか…」

「ああ、でも、あのお姿は正しく魔王陛下のものではないか……」

「！」

「うわあ。着飾らせてみたい……かも」

魔王城に務める老若男女が各自好き勝手囁き合ひつ中、十歳前後の子供姿の魔王が玉座から立ち上がる。途端にその場にいた誰もが口を閉ざし、ざわめきが収まった。

「えー、その、今のオレの姿を見て魔王と納得し難い者も多いだろうが、こんなナリでも魔王だからな。隠し子とかでもないし、正真正銘、お前らが知る魔王で間違つとらんぞ！」

そこで一旦、魔王が口を閉ざす。

「この姿は力を使い過ぎた副作用みたいなものだから、また時間をかければ元の姿に戻る。だから、それまでこの姿のままで頼むよ、オレの可愛い子供達？」

巫山戯た口調ながら、跪く魔族達に呼びかける声には確かな信頼と慈愛が込められていて、それは今までの魔王の話し方と全くと言っていい程同じであつたがために、魔族達はそれ以上何も言つ事無く万感の思いを持って一斉に頭を下げたのであった。

## 魔王城の人々

お披露目も無事に終え、所変わつてここは魔王の執務室。普段は限られた者にしか出入りの許されない、魔王城の『心臓』とでも言ひべき場所に彼らはいた。

「ううう……。あ、あたくしの、あたくし達の魔王陛下が、陛下があ～つ。あの凛々しくもお美しいお姿から、お可憐らしくもこの様な姿になられるとは……おのれ、勇者っ！ 断じて許すまじつ！…」「しかしのう。当の勇者本人はとつぐの昔に異界に還られたようじやで。許すも何も、何をしでかすつもりじゃ？」

「でもさ～、陛下が本気出せば、例え異界出身だったとしても勇者なんてイチ口口だつたんぢやない？ それこそ、これまでの馬鹿勇者達みたいにさ～」

惜しむ事無く最上の物のみで構成された魔王の執務室内にいるのは、黙々と書類仕事に勤しむ魔王補佐・藍玉と困った様な表情の魔王と他三名。

彼らは魔王の配下にて、魔王收めるこの国の『行政』『軍事』『司法』を司る三名の魔族だ。

まず、切々と勇者に向けて恨み言を吐き続いているのは、行政を担う文官筆頭・朱炎。

燃え立つ様な朱色の髪を豪奢に結い上げ、翡翠の髪飾りで留めている。

やや吊り気味の明るい若葉色の瞳に、険のある美貌と成熟した蠱惑的な肢体を持つ美女である。

隣で朱炎を宥めているのは、司法を司る判官筆頭・蒼氷。肩より少し長い程度の群青色の癖のある巻き毛に固く閉ざされた両の瞼。

老人の様なゆつたりとした喋り方に反し、その見た目は十五歳程度の少年である。

すつ、と通つた鼻梁と髪の色から冷たい印象を抱かれがちだが、見目に反してその表情は柔らかい。

最後に語尾を伸ばしながら魔王を見やつたのは、軍部を掌握する武官筆頭・緋晶。

濃い金髪に緋色の瞳が特徴的な背の高い青年で、笑みを浮かべているものの、その眼差しは何処か責める様に魔王を見つめている。武官らしく動きやすい服をだらしなく見えない程度に着崩した不真面目そのものの姿だが、彼が身動きをしても服に付いている貴金属や腕輪の類が音を立てたりしないのは、彼の鍛錬の成果ともいった。

「取り敢えず泣き止んでくれ、朱炎。お前がオレの事を思ってくれるのは分かるが、勇者を恨むのは……筋違いだ」

「陛下……」

朱炎の潤んでいる目元に、絹のハンカチを当ててそつと涙を拭う。頬を薔薇色に染め、豊かな胸元に手を当てる姿は、まるで恋する乙女のよう。

魔族の子供達の大部分の初恋は魔王であるため、朱炎の場合もその例に漏れず子供の頃からの憧れの人慰められ、幸せそうだ。

最も、今の子供姿の魔王では普段は勝ち気な姉を慰める弟または妹……にしか見えないのだが。

「それから、緋晶。責める様にオレを見るのをやめてくれ。なんか居心地が悪いぞ」

「はいはーい。俺は別に責めてなんかいませんけどねー」

「よつぽど勇者相手に腕比べを出来なかつたのが悔しかつたようじやな。大人げないぞ、緋晶」

「つるさいよ、蒼氷のじい様。俺達の中でも陛下に次に長生きなじい様にだけには、言われたくないですよー」

窘められ、わざとらしく首を竦めた緋晶に、蒼氷が苦笑する。

木の精靈族エルフに次いで長寿で知られる魔族の中でも、魔王を除いた中で最も長生きな彼は、今年で一五〇〇歳近くになる魔族であった。

「陛下。無駄話をしている暇がありましたら、少しでも口の代わりに手を動かして頂けませんか？ 書類は未だ山の様に積まれております故」

わいわいと騒ぐ面々をぎりつ、と睨んだのは魔王補佐である藍玉だ。

徐々に騒々しさを増していく面々に苛立ちを覚えているのか、米神に青筋が浮かんでいた。

「……そつだな。それでは、目的を果たしてもうひとつするか

魔王が軽く溜め息を吐いて、朱炎の目元から魔王の手が離れる。それにやや残念そうな表情を浮かべた後、朱炎は俄に視線を鋭い物へと変えた。

## 世界情勢（前書き）

まあ、一気にパワーバランスが崩れた訳ですから。

## 世界情勢

「人間族の王が魔王討伐に成功したと公式に発表してからほぼ一両日が経ちますが、今の所、他種族の国家間に大きな動きはございません」

厳しい顔付きのまま、朱炎が滔々と述べる。それに魔王は小さく頷いて、続きを促した。

「どちらかと言つと、未だに半信半疑と言つた具合ですかのう。人間族の王の言う事を本気で信じても良いのか、それともこれも魔族の嘘で、実は魔王は生きているのではないか……と疑つて身動きの取れない者が大多数のようですね」

「ま。実際に我らが魔王陛下はこうして俺達の前にいる訳だしね~」

眞面目に蒼氷が続ければ、緋晶が囁く。

「しかし、念のためにオレの剣は人間族の城に置いておいたのだが……。それでも、信じられんと?」

魔王討伐の最も信憑性のある証拠として、あの愛劍を白亜の城から回収せずに置いたのだが、随分と疑り深いものだ。

「いえ、現に最も我々を目の敵にしている木の精<sup>エルフ</sup>族などは、彼らの領土内で今にも魔族に対しても戦端を開こうとする者ともう少し様子を見るべきだと主張する者で一分されているそうです。実際、開戦派の者達は陛下が滅ぼされた証拠として魔剣の存在を述べているようですし」

「その一方で、人間族の王が家来達にせつつかれても中々重い腰を

上げない事も、魔王生存説に拍車をかけてありますわ

「なるほど、ね」

藍玉と朱炎が口々に言い募ると、魔王はにんまりと口角を吊り上げた。

「ま。当分の間、対・木の精靈族用に警戒態勢を取つておくだけで充分だろ。あの保守派共は口論に百年かけられるほど、氣の長い種族だからな」

「御意。人間族は放つておいても良いのですか?」

「問題ない。いざ、向こうが戦端を開きかけたら、あの剣を取り戻せば良いからな」

そうなれば、あの白亜の城の住人達は混乱の渦に突き落とされる事となるだろ?」

「木の精靈族対策はそれでいいとして、他の精靈族はどうします?」

「守銭奴共は放つておいて構わんじやろ。何かあれば、奴らの住む火山に金塊でも撒けば、暫く我らの事など忘れるじやろうて」

「くくっ……。精靈族の中でも最強と言われる火の精靈族相手にそれはないでしょ、蒼氷のじい様。確かに光り物好きなあいつらには最適の手段だけさ」

「薄情者の風の精靈族達は元より世俗に興味が無い。奴らの邪魔をしなければこちらに手を出して来ないだろ?」

「薄情者……。まあ、たしかに陛下の仰る通りですわね。土の精靈族達と水の精靈族は如何致します?」

「水と土の精靈族に至っては気にかけるに値しませんよ、朱炎。所詮、器用貧乏と自己中ですからね」

書類を捲りながら、藍玉が会話を締める。

そうして彼らは姿は幼子でも敬愛する王の方へと振り向いた。

「となると、やはり第一に気をつけるべきは木の精<sup>エルフ</sup>靈族だけだな。念のためだ、魔王が倒れたと積極的にオレ達の方から噂をばらまいてやれ」

「了解しましたー、陛下。それで奴らが疑心暗鬼に陥って、内部崩壊でもしてくれれば願つたり叶つたりだと思います?」

軽い口調ながら、その内には鋭い毒と棘が潜んでいる。

普段から、魔族の事を『混ざり者』と呼んで蔑んでいる、木の精<sup>エルフ</sup>靈族相手に好感を持つている魔族を探すのは難しいだろつ。

今執務内にいるメンバーの中でも、前線に立つ機会の多い緋晶はその傾向が顕著だ。

腕を振つて、これ以上この話を続ける気はないと行動で示す。彼らが口を噤んだ後、魔王は囁く様な声で呟いた。

「 オレがこんな姿になつた事で面倒をかけると思うが、これからもよろしく頼むよ」

静かになつた執務室内に、魔王の声が思いの外響き、誰かが息の飲む。

慈愛と感謝の込められた幼い響きの声に、魔王配下の魔族達はその場で跪いて彼らの王に向けて一礼したのであつた。

## 世界情勢（後書き）

木の精靈族 エルフ || 保守派  
火の精靈族 ドラゴン || 守銭奴  
風の精靈族 シルフ || 薄情者  
土の精靈族 ドワーフ || 器用貧乏  
水の精靈族 ウンディーネ || 自己中

身も蓋も無い種族的特徴でした。

書類、書類、また書類（前書き）

お気に入り百件登録感謝します！

## 書類、書類、また書類

右を向いても、書類。  
左を向いても、書類。

背後を振り返ってみても、書類。  
だからといって前を見据えても、書類を持った側近が立っているだけだった。

「もついやだ―――！」

勇者も去り、魔王のお披露目もすみ、今後の計画も練り終わった  
平和な午後の魔王城。

魔王城の「心臓」ともいえる魔王の執務室の中で、うさぎりした  
声が上がった。

「もうやだ、もうやだ、書類仕事ばかりなんて、もつ飽きたつ――  
「口を動かさずに手を動かしてください、陛下」  
「動かしとるわ、ちつきかひー。」

がりがり、と紙を削る様な音を立てながら、羽根ペンが書類の上  
を滑る。

勇者がやつてくるのに合わせて後回しにしていた仕事が、大量の  
書類の束となつて魔王を取り囲んでいる現状、どんなにいやでも魔  
王は仕事をせねばならなかつた。

「そもそも。そんなに仕事が嫌だったのでしたら、今までの勇者同  
様、異世界出身の勇者も返り討ちにすれば良かつたではありませぬ  
か。それを下手な情けなど掛けて、あんな小細工などをしでかすも

のだから後々忙しくなるのですよ」

「つるさいぞ、藍玉。オレを罵るか、仕事するかの、どっちかにしておけ」

ぎりり、と琥珀の双眸が藍玉を睨む。

子供の姿をしている割に中々迫力のある睨みにも、藍玉は動じる事無く、魔王の署名が済ませた書類の整理を素知らぬ顔でしていた。

「あー、つまらん。書類もこんなにあると流石に憂鬱だな。なんか面白い事は無いのか?」

「ついこの間まで、対・勇者用とか言って好き勝手していくくせに……」

ぶつぶつと藍玉が呟くが、済ました顔でスルーする。

何千年も生きていたら、時偶馬鹿をやりたくなる時が来るだろう。魔王に取つて、今回の勇者襲撃は滅多に無い娛樂であり、今までに無い程にハマった遊びでもあった。

「あーあ。勇者がまだいた頃は良かつたなあ……。勇者にバレない様にと色々と策を巡らせて、時々勇者をからかって。岩人形で怪物を作つて勇者を襲撃せたりして」

間違つても勇者を殺さない様、絶妙の匙加減で岩人形を精製して。あれほど刺激のある暇つぶしは今までにもあまり無かつただろう。

「勇者に同情したと仰っていた割には、彼を弄つて遊んでいた様に聞こえますか?」

「同情もしてたから、倒されたフリをしてやつたんだろ?」

ふつ、と可愛らしい溜め息を吐いて、書類の山を琥珀の瞳で睨む。中々減る様子を見せない書類の山の上から、一枚とつて流し読む。書かれていた内容に、魔王の柳眉がよつた。

「おい、藍玉。これは間違いじゃないのか？」

「は？ おや、どうやらそのようですね。警察……緋晶宛のものですから、後で彼に渡しておくるとしましょう」

武官である緋晶は軍事以外にも、治安維持の役割を担う警察機関の長でもある。

この書類の内容は、どうやらかと言えば警吏向けであるため、その長である緋晶に渡すのが自然な成り行きであった。

「いや、待て」

「陛下？」

「折角オレの所に来た書類だ。ここのはオレが何とかしてやるのが筋とこうもの」

ひらひら、と愉快そうに書類を揺らしながら魔王陛下は呟いた。

## 書状

初代にして永代たる魔王の治める魔族の国は、夜空色の魔王城を中心には、蜘蛛の巣状に魔族達が住む魔族の街が存在する。

八本の街道とそれに添う形の城下町。

今回、魔王の書類の中に紛れ込んでいた書状は、人間族の王国に近い街に住む女性が出した物であった。

\* \* \* \*

「魔王陛下、今ならまだ間に合います。直ちに書状は緋晶に任せて、今すぐ城に帰りましょう」「うう

「そうイライラするな、藍玉。ひだりきよくただ話を聞くだけじゃないか」

書状の差出人の女性と待ち合わせしていた喫茶店で、藍玉と隣り合わせに座りながら、今は幼子の姿の魔王は足をぶらぶらと揺らじた。

「……城にはまだまだ書類が堪つておりますが？」

「嫌な事を思い出させるな。ちょっとした気晴らしだ」

赤と茶色の制服を着込んだウェイトレスが、不思議そうに並んで座る二人を見つめながら、横を通り過ぎる。

二人共すっぽりと顔を隠す様なフードを被り、特に何も注文する事もなくただ席についているのだから、不審に思われてもしょうがないだろう。

「おや。どうやら書状の主が来た様だぞ」

カラソ、と高い鈴の音が響き、木製の扉を押し開けて店内に新たな客が入って来る。

肩まで垂らす栗色の髪を白のリボンで結んだ、焦げ茶色の瞳の可愛らしい雰囲気の女性だ。

きょろきょろと店内を見渡しながら入って来た女性に、魔王が立ち上がりて右手を振ると、ホツとした様子で駆け寄つて来た。

「す、すみません。遅れた様で……。念のため、呑い言葉を確認しても良いですか？」

「構わないとも。保守派、頑固者で石頭ときたら……？」

「えっと、木の精霊族ですね、お役人様！」

「……木の精霊族が聞いたら今にも攻め込んできそうな言葉ですね」

きやあきやあ、とはしゃぎあつ一人を見つめながら、藍玉がフードの下でボソリと呟く。

幸いにしても誰の耳にも届かなかつた様だ。

「サファイア嬢で、お間違ひありませんか？」

「いいえ、お役人様。確かに私の名はサファイアでしたが、今はもう違います。の人と共にこの地で生きる事を決めた今となつては、その名はもはや過去の物」

魔王とはしゃぎあつていた女性が、藍玉の言葉に毅然とした態度で首を振る。

それまでの何処か可愛らしさの強かつた顔が、その言葉を発した途端、凛としたものとなつた。

「ふふ……。オレの部下が失礼したな。失敬、それでは魔族の名で呼ぶとしよう。構わないか、青蘭嬢」

「ええ、勿論です」

につこりと微笑んだ女性に、魔王が愛おしそうな顔を見せる。それに気付いて、藍玉がコホンと空咳を上げた。

「ところで、青蘭嬢。旦那とは上手くいっているみたいだな」「まあ、お役人様！ 主人をご存知ですか？」

向かい合う様にして席に着き、他愛のない話を二言三言済ました後、さり気なく魔王が口火を切る。

「ああ。一時期、オレの職場でも話題になつたからな。あのヘタレがようやく思い人と結婚出来たと」「恥ずかしながら、求婚は私からでしたの」

きや、と頬を赤らめながらの女性の言葉に、それは良い事を聞いたと言わんばかりに魔王が口角を持ち上げ、藍玉はヘタレめ……と声に出さずに呟いた。

「人間族の女性として生きていた貴方が、何もかもを捨ててそれでもあのヘタレの手を取ってくれて本当に嬉しく思う。この国にはもう慣れたかな？」

「はい……。愛する人と一生を共にする事が出来る喜びも『ございましたが、同時に何もかも知らない世界で上手く生きていけるかどうか不安でしたけど、皆様優しくて……本当に幸せです」

そう言つてはにかむ青蘭嬢、つまりサファイアは、元は人間族の王国に住む一介の村娘であった。

しかしながら、何の運命の因果か村を訪れた魔族の男性と恋に落ち、周囲の反対を押し切つて駆け落ちした女性でもある。

じつして異種族恋愛の典型的パターンの様な物語を経て、つい三ヶ月前に今の旦那と彼女は結婚した。

「本当に、今までにない程幸せなのですが……」

幸福で輝いていた女性の顔が曇る。

卓の上に置かれていた青蘭の手が小刻みに震え、表情に怯えの色が混ざった。

「……最近、何か可笑しいのです。　外に出る度に、視線を感じて」

そつと魔王が、震える青蘭の手の甲に自身の手を乗せる。

他人の温もりに、安堵するかの様に青蘭の体から強張りが抜けた。

「家には、私宛に変な手紙が届くし、もうなにがなんなのや……！」

「へタレ……じゃなかつた、旦那にはこの事は？」

「主人は今、大事な仕事に取りかかっていて話せないので。それに、あの人への負担になる様な事はしたくなくて」

魔王が藍玉に手配せをする。

「それで養母に相談してみても、妊娠のせいと気が立つていてるだけじゃないかと言われるだけで……でも……」

蚊の鳴くよくな声で、青蘭が囁く。

「……気のせいじゃないんです。もう怖くて、怖くて……」

わっ、と泣き出した青蘭の背を宥める様に擦りながら、魔王は周囲へと視線を走らせた。

書状（後書き）

ヘタレ」と青蘭嬢の旦那様は後々登場の予定。

## 取り敢えず現状を

ふるふる、と子兎の様に震える青蘭を抱きしめ、宥める様に背中を叩く。

心音と同じ早さで叩かれる単調な刺激に、体の震えが徐々に収まつてくる。

「……そう、良い子だ。ゆっくり息を吸って、そう吐いて。…落ち着いたか？」

「ええ……。本当にすみません。お見苦しい所をお見せ致しました」

僅かに潤んだ眼差しのまま、にっこりと青蘭が微笑む。

フードの下から微笑み返して、魔王は青蘭から離れ、元の席に着いた。

「お腹に子がいるのだろう？　あまり無茶はしない方がいい」「ええ。そうですね……」

まだそんなに膨らんではないが、確かに自分以外の命が宿つて いる腹部を愛おしそうに優しく撫でる。

「それにしても、魔族の方々は年齢と外見がそぐわぬ方が多いとお聞きしていましたが、お役人様もそうなのですか？」

「ああ。今は子供の姿だが、じつは青蘭嬢よりも、この男よりも年上だぞ」

「くい」と隣の藍玉を指し示して、魔王が軽口を叩く。  
くすくす、と青蘭が笑った。

「……さて。酷な事をお訊ねしますが、青蘭嬢。今までに受け取った不審な手紙を我々に見せては頂けないでしょうか？」

「あ、はい。そうですね」

『じそ』『じそ』と婦人用の小さな鞄に手を突つ込み、そこから何重にも油紙に包まれた封筒を藍玉の方へと寄越す。

常の如く淡々とした様子で受け取った藍玉が、封筒から紙を取り出した。

「確かに、受け取って嬉しい物とは言えんな」

横から覗き込んだ魔王が、苦々し気な眉根を寄せた。

どこにでもありそうなふれた用紙には、乱暴な筆跡で『嘘つき女』『裏切り者』『許さない』といった具合の恨み言が延々と綴られていた。

「最初にこれを受け取ったときは、暖炉で燃やしてしまいました……でも、最初の手紙を受け取ってから、三日おきくらいにこのような事が書かれた手紙が家のポストに届くんです」  
「旦那には、この事は？」  
「言つておりません」

悲しそうに、青蘭が首を横に振る。

「届く時間もまちまちで……。でも、家に私しかいない時に限つて届くんです」

「消印や、差出人の住所も書かれていませんね。まあ、当然ですが手紙ではなく、それが入つていた封筒を何度も見返しながら藍玉が一人冷静に呟く。

そうした後、訝し気に封筒の表、受取人の名前が書かれた部分を指でなぞった。

「変ですね……。」この宛先、何故……？」

「兎も角、こんな不愉快な手紙など一度と見たくないだろ？。これは我々が預かる事にしよう」

「ありがとうございます」

頭を下げた青蘭に、魔王が「とにかく」と口を開いた。

「とにかく、青蘭嬢。今日はここに来るまでに視線を感じなかつたのか？」

「はい。その手紙が届いた口には視線は感じませんの」「ふうん……」

焦げ茶色の瞳に核心を込めて青蘭が頷く。

そんな彼女に、やや居心地が悪そうな表情に成った魔王が忌々しきに口を再度開いた。

「その、青蘭嬢。貴女が今置かれている状況についてだが……」

「はい。なんでしょう、お役人様」

「おそらく貴方はストーカー被害にあつておられます」

「え？」

きょとん、と目を何度も瞬かせる青蘭。

何がなんだか分かつていない様子の彼女に、溜め息を交えつつ魔王が頷いた。

「信じられない気持ちは分かるが。おやりく」これはストーカーとみて間違いないだろう。犯人はどうやら、青蘭嬢があのヘタレの

奥方に成つた事が相当気に食わないらしい」

## 魔王のツラワマ（前書き）

ストーカーとは？

：特定の個人に対し異常な程関心を持ち、その人の意思に反して後を追続ける者。

<広辞苑 第五版> 参照

## 魔王のアリカラ

ギラギラと理解し難い、いや、理解したくない欲望を火種に燃える、柘榴色の瞳。

普段は猫の様に細められているそれが嘘の様に見開いて、自分の姿を映しているのかと思つと鳥肌が立つた。

『好きなんだよ、心の底から。君しか欲しくないんだ』

形の良い唇が動いて、その様な言の葉を紡ぐ。  
相手が囁くだけで、熱のこもった吐息が肌をくすぐる。  
その感触がおぞましくて、自分の顔面から血の気が引いていいのが分かつた。

『こんな想いは初めてなんだ。お願いだから受け止めて欲しい』

きめ細やかな白磁の肌と、その肌に栄える黄金の髪。  
髪の一筋から睫毛の一本に至るまでに完成された完璧なる美しさ。  
至高の芸術品を思わせるその顔を寄せられれば、誰であれ陶然としてその美しさに酔ってしまうだろう。

『ねえ、お願いだ。僕の想いを受け止めてくれるよね？』

しかし、生憎そのお綺麗な顔を寄せられた所で自分が感じるのは嫌悪感だけだ。  
「どうか、目の前のこいつは、自分がどれだけ嫌そうな顔をしているのか見えないのでどうつか。」

『愛しているよ、＊＊＊＊。どうか結婚して欲しい』

死ぬ氣で嫌そうな顔をしているであろう、「相手はそんな事を気にもしない。」

勝手な事を言いながら、赤い唇を寄せてくる相手に、自分は絶叫した。

\* \* \* \*

「 ひ、ぎやあああああああああつ……」

「如何なさったのじやつ、魔王陛下！？」

それこそ身も蓋も無い叫び声が、城中に響き渡つたであらう。

場所は、魔王城の心臓部。

言わずもがな、魔王の執務室が悲鳴の発信地だった。

「へ、陛下！ 何が何なのかよつ分からんのじやが、ひとまず落ち着くのじや……」

「うわああああつ！ 怖氣と鳥肌と蕁麻疹じなんましんが立つてゐううつ……」

今までに田にした事が無い位、その魔性の美貌を青ざめさせた魔王が両手で一の腕を擦る。

宣言通り、微かに露出している肌の一部からは鳥肌が立つていた。

「か、過去に例を見ない、気持ちの悪い夢を見てしまった……」「……大丈夫、ですかの？」

十一、三歳程度の容姿でありながら、達觀した老人の様な口調で話す蒼氷が、やや呆れた様に頭を振る。

その隣で、魔王の方は先程思い出してしまった忌まわしい過去に頭を抱えた。

「うう……。なんだつてば、今更あんな夢を……。もう一度と見るまいと思っていたのに……」

「随分な悪夢を見られたようですねのう。折角の気晴らしも、上手くいかなかつた様で」

ふふふ、と含み笑いをする蒼氷に、未だ青ざめた顔が向けられる。琥珀色の双眸が、閉ざされたままの両眼をじつとりとした視線で見据えた。

「…………人が悪いぞ。仕事の最中に寝てしまつて悪かつたな」「いえいえ。その様な些事は気にしておりませぬよ、魔王陛下」

寝る事は育つと言いますからのう、と言つてほけほけと笑う側近を魔王が睨む。

他は誰であれ、少なくとも現在の自分と似た様な年格好の蒼氷にだけには言われたくない台詞だ。

「して？ 何故、悪夢などを視られたのかをお聞きしても？」

「大した事じやないさ。原因は今日の青蘭嬢の話だろつな」

「青蘭嬢……？ あの灰砂坊の奥方の事ですか？ 三月程前に、奥方を迎えた？」

印<sup>サイン</sup>が押された書類を小分けして運びながら、蒼氷が首を傾げる。それにようやく鳥肌が収まつて来た魔王が小さく頷いた。

「ああ。ちょっと警吏宛の嘆願書が混じつていたからな、藍玉と役人に扮して会いに行つてみたんだ」

「それで？ 確か奥方殿は元は人間族でございましたな。何か不都合が？」

「それがなあ……」

大きな溜め息を吐く。

口と同時に手を動かしながら、休憩時間の間に起じつた一連の出来事を話す。

「ふーむ。聞けば聞く程、ストーカーの被害に遭つておられる様に見られますのう」

「だろ？ 一応、証拠の手紙を受け取つて、念のため、藍玉に風で青蘭嬢の周囲を見張らせておる」

水の精霊族ウンディーネと風の精霊族シルフの混血児である藍玉は、風と水の二元素を操る事が出来る魔族だ。

「しかし、魔王陛下。あのヘタレ……失敬、灰砂の坊やには伝える気はないのですかの？」

「いーや。明日の朝一番にあのヘタレに会いに行つて、奥方の身に何が起こつているのか知らせてやるつもりだ。仕事が忙しいらしいが、それこそ魔王命令で何とかしてやる」

堂々と公私混同を宣言して、羽根ペンを動かす。

「……魔王陛下」

「なんだ、蒼氷」

「もしや、ストーカー被害に、過去遭つた事が？」

「……」

その無言が、返答であつた。

**魔王リアのリカウマ（後書き）**

灰砂：青蘭嬢の旦那さん。後々、登場予定。

## 旦那様は魔族様（前書き）

ようやく青蘭嬢の旦那様登場です。

## 旦那様は魔族様

「ちょっと失礼するぞ、朱炎」

「ま、まあ！ 魔王陛下！！」

座り心地の良さそうな椅子に座し、孔雀の羽根ペンを握つて部下に指図をしていた朱炎が、扉を押して入つて来た魔王に頬を赤らめる。

同時にあたふたと体のあちこちに手を走らせては、ずれてもいい髪飾りの位置を直した。

「やあ、朝早くに済まないな。ちょっと人を探しているのだが」

「あら。誰ですか？」

「いや、それがな……」

きょろきょろと、広々とした室内を見渡す。

室内のあちこちに置かれた仕事机に座つている朱炎配下の魔族達が魔王の入室に慌てて跪いた。

「あー、別に気にしなくていいから。オレの事は空氣と思って仕事に勤しんでくれ

「出来ません！…」

手で立つ様に合図しながら、にっこり笑つた魔王の御言葉に、魔族達が声を合わせて絶叫する。

魔族に取つて、最も慕わしい存在である陛下を空氣だなんてつ！ という無言の抗議もなんのその、魔王は何か言いたげな魔族達の間に視線を走らせ、お旦当ての人物を見つけ出した。

「ああ、いたいた。　おいで、灰砂<sup>かいさ</sup>」

「わ、私ですか！？」

幼い容姿とはいえ、魔性の美貌に微笑みかけられ、灰砂と呼ばれた魔族が慌てて立ち上がる。

女性ながらも長身である朱炎よりもやや背が低い、銀縁眼鏡をかけた人間族における二十歳後半の男だ。

肩を超す程度の長さの癖の無い暗灰色の髪を白いリボンで結び、背中に髪を垂らしている。

明るい水色の瞳が、忙しく動いて何度も瞬く。

文官の制服をきつちりと着こなした硬派で真面目な雰囲気の持ち主であるが、今は少しばかり不安そうだ。

「そう固くなる事は無い。暫くの間、こいつを借りていいくよ」

「承りましたわ、魔王陛下」

上司である朱炎に助けを求める様に何度も水色の瞳が動くが、頬を紅く染めたままうつとりと魔王を見つめる朱炎は気付かない。

敬愛する魔王に呼び出される理由も分からないま、子供姿の魔王に半ば引き摺られていった同僚の姿に、室内の魔族達は好奇心と羨望の入り交じった視線を送った。

「　　なにぼさつとしているの！　仕事しなさい、仕事つ！」

魔王の姿が見えなくなつた途端、恋する乙女から仕事の鬼と変貌した朱炎に怒鳴りつけられ、魔王の後姿を見送つていた魔族達は慌てて仕事を再開した。

\* \* \* \*

「そう固くなるな。お前がヘマをしたから呼び出した訳じゃない」「は、はい」

晴れ渡つた夜空の色の城壁の上から広大な領土を見下ろしながら、魔王が宥める様に灰砂へと声をかける。

途中、巡回途中の魔族の兵士達の敬礼を受けながら、二人は城壁の端まで足を進める。

興味深そうにこちらへと視線を寄越して来る兵士達に軽く手を振つて人払いを命ずると、心得た表情になつて、兵士達が一人の側から離れていった。

足を止めた魔王の前に、灰砂が跪く。

明るい水色の瞳と琥珀色の視線が同じ目線で交差した。

「昨日の事なんだが、お前の嫁さんにあつたぞ。可愛い子じゃないか」

「ええっ！！ サファイ、せいらん青蘭に会つたんですか！？」

相手は魔王であるといつのに、突然の告白に灰砂が飛び上がる。もしここに朱炎がいたら、即刻不敬罪で牢に叩き込まれたかもしれない。

「一応知らせとしては聞いてはいたが、直接青蘭嬢に会つたのは昨日が初めてだ。良い人を選んだな、灰砂」

「……はい」

自分の言葉を噛み締める様に灰砂が頷く。

城壁の上を吹き抜ける一陣の風が、暗灰色の髪と光を吸い込む様な黒髪を空へと巻き上げた。

「人間族の娘として培つた全てを捨てて、お前と共に生きてくれる事を選んだ希有な女性だ。彼女を裏切る様な事をするなよ」

「勿論です……っ！ そんな事は絶対にしません！－！」

「いい返事だ。若人はこうじやなくちゃな」

にやりと笑つた魔王は見かけだけなら二十歳後半の灰砂よりも若いので、その台詞にはなんとも違和感が会つた。

「 だがな」

「陛下？」

不穏な雰囲気を感じ取つた灰砂が、おそるおそるといった様子で、僅かに自分の目線よりも高いうちにある魔王の顔を覗き込む。

覗き込んだ先の魔性の美貌は妖しく歪んで、嗤つていた。

「その可愛い嫁の危機に、なんつつでお前は気が付いとらんのだつ－！」

「わあああつ－！ お、お許しをつ、魔王陛下－－－？」

すっかりドスの利いた魔王の怒声と、訳が分からぬまま謝罪する灰砂の悲鳴が、城壁の上にいる兵士達の耳にまで届いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0974y/>

---

魔王陛下、お仕事ですよ

2011年11月24日22時05分発行